

大学における教学マネジメントの現状と課題

—— 学修者本位の教育の実現を目指して ——

聖心女子学院・常務理事 ひびや じゅんこ
日比谷 潤子

第1部 大学における教学マネジメントの現状と課題

橋本（教育センター長）：それでは鳥取大学・全学FD講演会を実施したいと思います。まず田村教育担当理事より、開会の挨拶をお願いします。

田村（教育担当理事）：皆さん、こんにちは。日比谷先生には、お忙しいなかご講演いただくことになり、また本学の役員・部局長に直接ご指導いただくということで、大変喜んでおります。参加者の皆様には、既に講演会の趣旨をご案内してありますが、最初に本学の現状について簡単にお話しします。本学における教育改革の体制がこれまでシステムとして成り立っていたか、経営サイドから対応できていたかというところが多い。そういう点を反省して、ここ数年は質保証、あるいは教学マネジメントの体制について整備を進めています。この分野で先進的に、また中教審の議論にも参加されている日比谷先生のお話をうかがえるということで、非常にありがたく思っております。また今回この問題をFD講演会として取り上げましたのは、決して部局長あるいはマネジメントする方々だけの問題ではなく、教員一人一人、全員が意識して取り組むことが必要だという判断によるものです。どうかこうした趣旨を十分に汲みとっていただき、講演をお聞きした上で熱心に論議していただきますよう、お願いする次第です。ともあれ、今日の講演会が本学の教育改革にとって大きなマイルストーンになりますことを祈念して、開会のご挨拶といたします。本日はよろしく願いいたします。

日比谷：皆様こんにちは。聞こえますでしょうか？今日はお招きいただきありがとうございます。実は私、鳥取県には足を踏み入れたことがありませんので、こういう状況でなければ、鳥取に行けるいいチャンスだったなど、

ちょっと残念でしたが、感染者も増えている状況ですので、オンラインという形で一時間弱お話をし、色々質疑応答に応じたいと思っております。

先ほどタイトルをご紹介いただきましたが、今日お招きいただいた理由は2つあって、1つは、中央教育審議会・大学分科会の「教学マネジメント特別委員会」の座長をしておりますので、その立場からこの問題についてお話しするという。それからもう1つは、この3月まで国際基督教大学(ICU)の学長を務めておりましたが、リベラル・アーツに特化した大学ですので、後半はICUで取り組んできたことにフォーカスを当てて、お話しします。

(1) 教学マネジメントのあり方

① 「教学マネジメント指針」の概要

教学マネジメント特別委員会が一年の白熱した議論を行って、今年(2020年)1月に大学分科会で承認されたのが「教学マネジメント指針」です。皆様、もうあちこちでこのポンチ絵はご覧になっているかと思えます。詳しくは後ほどポイントごとにお話ししていきますけれども、1番重要なことは、今日のタイトルの副題にも使っていますけれども、「学修者本位の教育」、ここがキーワード中のキーワードでして、それを実現していくための指針という位置づけになっています。今日も既に何回も「教学マネジメント」という言葉が出てきましたが、これは「大学がその教育目的を達成するために行う管理・運営であり、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる重要な営みである」と定義されています。後ほど詳しくお話ししますが、ここで大事なところは1番最初、「大学がその教育目的を達成するために」という部分です。日本には何百もの大学があり、鳥取大学のような国立大学法人もあれば、公立大学、私立大学、様々なタイプの



大学があって、それぞれ教育目的を掲げています。それを達成するための管理ですので、この指針は、こういうことを押さえておくのがいいだろう、ということを示してはいますが、決してですね、全ての大学は一律にこれをやればいい、あれをやればいい、という性質のものではありません。それぞれの大学の教職員の方々が、その教育目的に沿って確立していくべきものである、ということを念頭においてほしいと思います。

このポンチ絵でもう1つ注目してほしいのは、右側のところに歯車のようなものが出ています。これは会議の事務局が作るのに大変苦労したのですが、3つのレベルというのがあります。最初は、どちらから見るかということになりますが、大学全体のレベル。そのもとに、たくさんの研究科や学部があり(それらを総称して学位プログラムと呼んでいます)、そしてさらにそれぞれの学位プログラムを構成しているのは個々の授業科目で、この3つの歯車がうまく噛み合うようなシステムを構築していくということが大変重要でして、今日の後半では、特に個々の授業科目レベルでこういうことに心がける必要があるのではないかということをお話ししていきたいと思っています。

② 「教学マネジメント指針」の性格について

まず、先ほどちょっと言いかけてましたが、指針の性格です。既にご存じと思いますが、これに先立ちまして、

中央教育審議会の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申」(2018年11月)が出ました。冊子をお持ちの方も多いと思いますが、是非お読みいただければと思います。そこではどういう問題意識を持っていたかと言いますと、色々な大学があると先ほども言いましたが、非常に真剣に改革に取り組んでいる大学もあれば、いささか努力が不十分な大学とに、二極化している指摘されています。ただしこれはあまりにも大雑把な二分割で、私が見るところ、真剣に取り組んで成功している大学、本当に一生懸命やっているのになぜか効果が上がらない大学、それからもちろん努力が不十分な大学もあると思いますけれども、このうちとくに一生懸命やっているのに今ひとつ手ごたえがないということがもしあれば、こういうポイント、ああいうポイントというのを考える上で、参考にしていただければと思います。いずれにせよ、二極化の結果、大学全体として十分な信頼が得られていないのではないか、という問題認識もあって、このグランドデザイン答申が作られた訳です。

なお、ここに書かれていることの中で、今回のこのコロナ禍でオンライン授業など色々新しいことに取り組まざるを得なくなり、ポスト・コロナとかウィズ・コロナの時代には、ちょっと合わなくなってきたところが無いわけではありません。特に国際交流に関する部分とか、オンライン授業に関することは非常に進みまして、ハイブリッドのいいところも出てきていますので、個別

具体のところでは少し考えを変えた方がいいのではないかとこの指摘を時々受けます。それもその通りだと思いますが、しかしグランドデザイン答申が掲げた目標や、理念の部分は、どういう時代になっても変わらないことだと思っております。

それで、先ほどちょっと触れましたが、教学マネジメントは、それぞれの大学の教育目的に照らしてどういう形ですればいいか、ということを考えていくべきものですので、まずそれぞれの大学の事情に合致した形で構築していくことが大事です。そしてそれを各大学が自らの責任において行う、つまりこういう指針が出てやらなくちゃいけないからやっている、ということではなくて、教育目的の達成のために自分でこれに取り組まなければいけない、という意識を一人一人持つことが大事だと思っております。

こういう指針を作りますと、どうしてもそういう傾向が出てしまうのですが、マニュアルのように受け取られることがあります。かなり具体的なことが書いてありますので、何かチェック・リストのように捉えられて、これやった、あれやった、はいOK、っていうふうになってしまうことを一番懸念しております。指針は総体としての体系ですので、1つ1つやればいいのかというわけではなくて、全体としてうまく機能していくために、強調すべきところも大学ごとに違いますし、委員会としてはこういうことを実施するのが必要、あるいは留意点と思っているものを盛り込んでおりますけれども、その中からそれぞれの大学の事情に合わせて何をすべきか、ここはそんなに重要じゃないということも含めて、考えていただければと思います。全ての大学が学修者本位の教育を実現していくためにできるだけ建設的な提案をしたいということで作りましたので、役立てていただければと思っております。

③ 特別委員会における議論の範囲

次に、今行われていることとの関連で申し上げますと、先ほどお話ししたグランドデザイン答申ができました時に、最後の章に「今後の検討課題」が挙げられました。その1つが教学マネジメント指針の策定、それから学習成果の可視化と情報公開のあり方に関する検討でした。実はこの章にはもう1つの事項、つまり国が行っている質保証、具体的には設置認可や認証評価の改善、それか

ら現在の設置基準の見直しなど、設置基準等の質保証システムについて見直しを行うこと、というのも挙げられていました。実は、2020年1月に教学マネジメント指針が承認された後、すぐに新規の部会を立ち上げるということでしたが、皆様ご記憶の通り、入学者選抜をめぐる混乱が起りまして、2020年の2月、3月あたりは、文科省は上から下まで全員それにかかりきりでしたので、すぐには立ち上がりませんでした。さらにそれが落ち着いてきた頃に、今度はコロナ禍になりまして、また遅れたんですけれども、ようやく2020年の7月3日から「質保証システム部会」が立ち上がっています。私もこの部会に参加していますが、来週12月23日に5回目の委員会が開催されます。こちらは時間をかけて進めていくことになっていますが、設置基準が見直されて、少なくとも一部が変わることはほぼ間違いのないと思います。設置認可というのは事前のチェック、認証評価は事後チェックですから、そのどちらに重きを置くかというバランスになりますが、このあたりのことは来年あたりに結論が出ると思います。かなり大きく動く可能性もあると思います。

なお先ほどの教学マネジメント指針を作った特別委員会も、この質保証システム部会も、ご存知の通り、配布資料ですとか、有識者からのヒアリングの内容、また議論の内容は全て文科省のウェブサイトにはアップされていますので、ご関心のある方は、実際の議論と同時進行でぜひご覧いただければと思います。

④ 教学マネジメント指針における5つのプロセス

さて、先ほどお話しした指針ですが、5つの柱からなっています。これが個々の授業科目のレベルでも、学位プログラムのレベルでも、大学全体のレベルでも、しっかりと構築されているということが大事です。

1つずつ見ていきますと、最初はいわゆる3つの方針を通じた学習目標の具体化です。3つの方針って言いますが、1番大事なものは、卒業認定学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー：DP）です。何故かという、これがそれぞれの大学の教育目的だからで、この大学、あるいはこの学位プログラムでは、これこれができるようになった人、こういう能力を身につけた人に学位を授与しますよ、というのを定めますので、学生にとっては目標になりますし、大学としては本学の卒業生にはこういう

資質・能力が備わっているのだという保証になります。今回私は、鳥取大学の学位授与の方針を見てまいりましたので、後にそれに即してお話します。よくお考えになって作られていると思いますが、ここは絶えず見直しをして、きちんと示されているかをチェックしていくことが重要だと思います。これが決まりましたら、それに向かって、どんなカリキュラムを作っていけばいいか、ということでカリキュラム・ポリシーが作られ、さらに、そういうカリキュラムで学んでいく人にどういう資質を持っていて欲しいか、ということアドミッション・ポリシーで書いていく、ということになります。

委員会の議論でちょっと面白いと思ったのですが、アドミッション・ポリシーがディプロマ・ポリシーとほとんど変わらない大学が少なくない、という発言がありました。この時はみんな大変笑ったんですけども、DPにはこういう資質・能力を身につけた人に学位を授与すると書いてあり、APではこういう能力を持っている可能性のある人を受け入れると書いてあるんですが、入ってから出るまでにどのぐらい伸びたかがあまり分からない。そんなに出来上がった人ばかり受け入れてもしょうがないので、やはりその大学に入ってから勉強している間に、あるいは大学で様々な活動をしている間に、どのくらい伸びるかということが1番大事だと思います。私がいくつかの大学を見た限りでは、DPは割と良くできているけれども、APはちょっと考えた方がいいと思うものもありました。

2つ目の柱は、授業科目、教育課程の編成ですね。これはCPに1番深く関係しているところです。どれくらいの科目が提供されているか、ということはかなり重要で、何か資格を取るといような場合にはなかなか難しい面もありますが、非常に多くの科目が提供されている大学が多いですけれども、ここに書いてありますように、科目の精選方法、それから学生が同時に履修する科目を絞り込んで、広く浅い学びよりは、やはり深い学びが、これからの大学教育にとっては非常に重要であると考えています。いずれにしても、ディプロマ・ポリシーの掲げる資質や能力をきちんと習得できるように、必要な授業科目を配置し、しかもそれらを体系的に構成することが重要なポイントです。

3つ目は、これはなかなか難しいのですが、本当にディプロマ・ポリシーに掲げた資質能力が備わったのか、ど

うやって把握するか、さらにそれを可視化するにはどうしたらいいか、ということです。ここでは、前提として、個々の科目ごとの成績評価がきちんと行われていることが重要になってきます。ここが崩れてしまいますと、それを積み上げていっても、きちんと成果を把握することができませんので、まずは個別科目の成績評価の信頼の確保に心がける必要があります。

それから4つ目、今日まさにこのFD・SDということと呼んでいただきましたが、今までお話ししたことを実現するために、教職員の能力向上や教育改善が必要ですので、そのためのFD・SDの充実、それからもう1つは様々なデータを集めて、それに基づいて教育改革の道筋を付ける、あるいは方向性を決めることが大事です。その基盤として教学IRも非常に重要な柱となります。ここは、最初に申し上げた、それぞれの大学が考える教育目的を達成するための教学マネジメント・システムですので、それを達成するために求められる教員・職員のありべき姿は何か、ということを中心に意識することが重要です。そこが決まると、じゃあどのような能力を伸ばしていけばいいか、あるいはどこが足りないのか、ということが分かると思いますので、これも大学として、どんな教員、どんな職員をあるべき姿として目指すかということ、提示することをお勧めします。

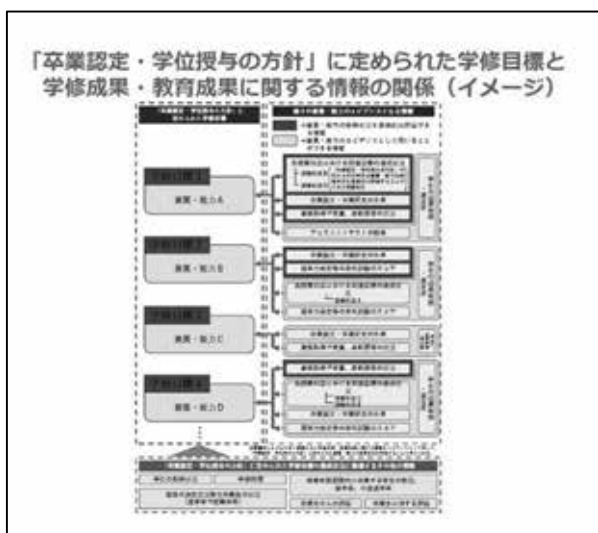
最後は情報公表ですが、色々な試みで情報公表されていると思いますけれども、これは色々な人に対して、例えば志願者もありますし、社会もありますし、あるいは学生自身に対してでもありますし、情報をしっかりと公表する、特に教育の質に関する情報をよく分かるように示していることが重要です。

⑤ DPの学修目標と学修成果の測定

次にディプロマ・ポリシーに関係するところをお話します。今日お招き頂きましたので、鳥取大学のディプロマ・ポリシーを見て参りました。でも、色々な学部、あるいは研究科がありますので、大学全体というところですのでけれども、皆様、ディプロマ・ポリシーの一字一句を覚えていることはないかもしれませんが、いくつあるかとかは、もちろんしっかり覚えてらっしゃいますよね。4つあるんですよね？それぞれ何かと言いますと、1は「文化、社会、自然に関する幅広い知識や各専門分野に関する深い知識を有し、これを理解するととも

に知識獲得のための方法と技能を有している」、2は「論理的思考力、的確な判断力、創造的表現力に基づき、様々な諸課題を探索し、解決を志向できる」、3は「地域・国際社会での将来の活動に興味関心を持ち、主体的・継続的に学び、自らの人生を豊かにする生涯学習力を有している」、4は「健全な倫理観を有し、豊かなコミュニケーションをもとに他者と協働し、実践する力を身につけている」、と。

大変素晴らしい4つのポリシーだと思うんですけども、今お示ししているスライドは、ちょうど学習目標4個で作られている文科省のサンプルですが、ぴったりあっています。そうするとですね、ここからなかなか難しいところで、例えば4番の「健全な倫理観を有している」、あるいは「豊かなコミュニケーションをもとに他者と協働し、実践する力を身につけている」というのを、じゃあ何で測ったらいいかということになります。



それで、例えば語学力のようなものは、学習目標の2に書いてありますけども、検定などの学外試験のスコアというのがあります。これはいろんな種類のものがありますから、受けてみてスコアが何点以上みたいなことで、比較的设置しやすい。それから今見たものでは、「論理的思考力」とか、「創造的表現力」というものも、卒業論文などで論理的な思考力がきちんと発揮されているとか、表現力があるとか、まあまあ見ることができないこともないと思います。

けれども、例えばディプロマ・ポリシー4番の「健全な倫理観を有している」というのは、テストをすると

というような性格のものではありませんし、何らかの状況があって、そこで健全な倫理観に基づいて行動できたかというようなことを、一人一人について見ていくというのは非常に難しいことだと思いますので、実は、公表する以前に、本当にそのような力が身に付いているかどうか把握するのはなかなか難しいと思います。

そこで指針では、例えば、個々の資質能力のエビデンスとなる情報にはこんなものがありますよといった例示はしているんですけども、やはりこれもどんなもので測るか、ここはやはり1番頭の使いどころと言いますか、皆さんで議論されて、ディプロマ・ポリシーを本当に身に付けたので学位を授与しますよと言うかどうか、考える際には重要になってくるだろうと思います。指針には、いろいろなことが書いてありますけれども、その他、例えば学習時間とか卒業生に対する評価みたいなものもありますけれども、もう1つはやっぱり一人一人の学生が卒業していく時に、ディプロマ・ポリシーに書かれているのがちょうど4つですけど、これとこれとこれとこれを私はきちんと身に付けた、そのエビデンスはこれですよと自分でも言えるような、そういう状況になることが理想かと思います。

⑥ マネジメント層の役割

次にいきますが、後ほど第2部でお話した方が良いのかもしれませんが、私、国立大学の関係でこの話をするのは、今日は二校目なんですけど、以前うかがいましたところで、「これを読むべき人っていうのは誰ですか？」という質問がありました。これは委員会でも議論したところなんですけども、まずはマネジメント層の学長、副学長、学部長、学科長の先生方、これらはそれぞれのところの責任者です。それから、先ほどお話ししたように、大学全体がシステムとしてマネジメントが出来ていないといけませんので、教職員お一人お一人に是非とも当事者意識を持っていただかないといけません。

マネジメント委員会の中で興味深く印象に残っていますが、IRのことを議論していた時に、ある委員から、こういう指針などが出るとマネジメント層の先生がIR担当者のところに来て、「今回こういう答申が出たので、何をすればいいか考えてくれ」と言われることがよくあるんだけど、そう言われた時に「責任者はあなたでしょう」と言えるように、是非ともマネジメント層がこれを

読むべきだ、というのを書き込んでくれ、と言われました。IRのオフィスが充実していることは非常に重要ですし、きちんとしたデータ収集も大事ですけど、やっぱりそれに基づいて何をするかを決めるのはマネジメント層ですので、是非ともここにお並びの役職者の方に読んでいただきたいと。

しかしですね、トップが旗を振っているだけでは実際の物事は動きませんので、今日FD・SD講演会ということで皆さんいらしてますけれども、一人一人の教職員の方も、なかなか全部読み込むのは大変とは思いますが、これがどう結果につながるかっていう実感が持てないとなかなか取り組みにくいとは思いますが、なんでこんなことしなくちゃいけないのかっていうのを理解して、その理解を深めることによって、自発的に取り組んでいただきたいと思います。

(2) 国際基督教大学 (ICU) の教育システム

ここまでが指針の概要についてのお話ですが、この後は先ほどお話ししましたように、個々の授業科目レベルの問題が皆様には1番関心が高いと思いますので、いくつかICUの事例をお話したいと思います。

① 国際基督教大学の事例1：シラバス

1. シラバス作成のガイドライン

先ほど申しましたように、特別委員会の議事録・提出資料の全てのものがウェブサイトにあがっていますが、ここでお話するのは第4回の委員会で、シラバスについて議論した時にICUから出した資料です。先生がたもそれぞれシラバスお作りになっていると思いますが、これはICUの学内ウェブサイトに載っているもので、シラバス作成のためのガイドラインとしてシラバス・デザイン、これに続いていくつかの項目にまとめてありますが、シラバスとは何であるか、これは教員・学生間の取り決め、いわば契約書である、教員が学生に対してどのような授業内容を保証するかを明示するツールです。したがって、ここに書いてあることをできるだけ具体的に、いつ実施し、学生がその授業で何を学び、目標達成にはどのような知識・スキルを得られているかをイメージ出来るように心がけてください、と書いてあります。シラバスそのものは外に向けても公表していますので、受験生も見るといふことで、こんな授業をしている、

あんな授業をしているというのが分かるように、ぜひ書いてください、ということをお話しています。

2. 効果的なシラバスを作成するヒント

次に効果的なシラバスを作成する一般的なヒントとして、1つは根拠を示すということをあげています。それから2つ目は具体的に記載する、簡潔に、しかし必要な情報をしっかりと書くということです。それから一度作ったシラバスを何年も同じように使っている先生はいらっしやらないと思いますけれども、数年はもちろん同じような内容でしますけれども、しかし一度作成したらそれで終わりということではなくて、一回、まあ一学期授業が終わったら、シラバスを見直して、必要な改定をその都度していくということが重要になってきます。授業評価ですとか、学生による授業評価、それから教員は学生の成績評価をするわけですが、例えば授業評価で、あれが分かりにくい、これが分かりにくいというコメントがたくさん来たり、また点数があまり芳しくないという時はしっかり見直す必要がありますし、それから成績分布も後でちょっと話しますが、あまりにも全員のできが悪いとなった場合はレベルを下げる必要がある、あるいはなぜそんなに成績が悪くなってしまったか、教え方のどこかに問題があったか、ということをよく見直してみる必要はありますので、チェックして直していくということが良いシラバスを作っていく上で非常に重要になってくると思います。

3. シラバス入力項目

シラバスに何を書くかということは、大学によっても若干項目に差があるかと思いますが、これはあくまでもICUの例ですけれども、まず「概要」では、「コース概要」、そして「事前に履修しておくことが望ましい科目または必須科目」、それから三つ目に「ディプロマ・ポリシーとコースとの関連性」、これが今の教学マネジメント指針との関係で大事な点になりますが、授業科目のレベル、学位プログラムのレベル、大学全体のレベルの3層になっていると申しましたが、そうなるとその1つ1つのコースがディプロマ・ポリシーとどんな関連性にあるか。先程の鳥取大学の例で言いますと、4つのディプロマ・ポリシーがありますけれども、例えばこの科目は3番、「地域・国際社会での将来の活動に興味関心を持ち」、というような、それに寄与するものであるという紐づけが大事かと思っています。それから「カリキ

ュラム上の位置付け」ですが、それぞれのカリキュラムの中で初級・中級・上級科目があると思いますけれども、その位置付けを示しておく、学生の履修の際に、まだ自分には難しすぎるとか、逆にもうここは十分やったので、上級のコースをとってみようというような、選択に資すると思います。

それからシラバスの書き方の「良い例」っていうのが書いてあります。(スライド資料の)1番目の例はですね、何が良いかというと、ICUのディプロマ・ポリシーとつながりがあること、地球市民というところがそうですけれども、そこが書かれているということ。それから学際的な学びというのも重視しているのですけれども、それに触れられているというところが良いです。それから2番目の例は、これをする人は必ず履修というようなことが書かれている。3番目の例も同様で、良い例としてあげております。

次に「学習目標」を書きます。これは必ず動詞を用いて説明するというので、「理解できるようになる」、「認識できるようになる」、「考えるようになる」、「始めるようになる」、「分析できるようになる」、最後に「理解できるようになる」、と書いてあります。今日は私が提出した資料を主にお見せしているんですが、先ほど申しましたように、文科省のウェブサイトに行きますと、提出された資料が全て上がってるんですけど、このシラバスの作り方、それから評価の仕方もそうなんですけれども、立命館大学の沖先生(立命館大学・教育開発推進機構 教授)が提出された資料は非常に良く出来ていますので、是非それをご覧いただきたいと思います。必ず参考になると思います。

次に書くべきことは「内容」です。1学期15回、あるいはICUは3学期制なので、1学期10回なんですけれども、それぞれの日程・各回で何をやるか、それから授業のスケジュールに合わせて課題や試験の情報も、ここで課題1を出すとかですね、ここで課題2を出すというようにしっかり書いておくと、学生の計画も立てやすいです。

もう1つは、課題や試験はやりっぱなしでは意味がないので、できるだけフィードバックすることが望ましいです。今日は盛り込んで来ませんでしたけれども、比較的最近ほかのところでお話をした時は、ここにフォーカスしてお話ししたんですが、東京大学が行っている調査、

あるいは昨年の暮れにありました文科省が試行でやった学生調査などでも、「レポートや試験が複数回あったか」という質問があります。そういうことは非常に増えてきていますので、昔のような1発勝負で成績がつくということは本当に減って、それは良いことなんですけれども、しかし課題はたくさんあるけれども、フィードバックがあったかという、非常に少ないんですね。「コメントがついて返ってきたか」という設問は、かなり絶望的だと私は思ってるんですけども、戻ってきてないという結果になっています。課題は出しっぱなしでは意味がないので、きちんとフィードバックをする、ICUはそれを重視していますので、シラバスでも必ず方法を記載しています。

それから「授業の形態」、それから複数の先生が教えるという場合には、この日はこの先生、この日はこの先生、ということも明記するようにしています。それから「授業の言語」は、英語開講の授業もあるかもしれませんが、この授業は日本語、あるいはこの授業は英語、ということを書いています。

そして「成績評価基準」です。これは、先ほどの教学マネジメント指針「5つのプロセス」の3つ目に「成績評価の信頼性の確保が必要」とあるんですけども、そこに関係する話です。成績評価基準のところ「悪い例」をあげているんですけど、「期末試験、中間試験、授業への貢献度を総合的に判断して決定する」、というのは悪い例ですね。具体的には評価の項目がどれと、どれと、どれということを書く。例えば、「中間試験30%、期末試験30%、レポート何%」というふうを書く。

それから評価のポイントですが、ここも先ほどの沖先生の発表資料を是非ご覧いただきたいのですが、いまシラバスは結構充実してきていますので、学習目標はなかなかよく書けているものが増えてきています。ところが、例えば学習目標が6つあったとして、中間試験とかレポートをして、そのどれが達成されたかを測っているかの子細を見るとですね、例えば1番から6番までである中で、1、2、3については様々な項目で評価しているけど、4、5、6については、これらを目標にしていると言いつつ、それが達成できているかどうか、本当は分かってないんじゃないかって思うようなシラバスが、けっこう多いと思います。最終的に項目と割合を示せば、成績はつけられることはつけられますけれども、目標に掲

げたことがきちんと全て達成できているかどうか、なんらかの形で評価される、そういう評価項目と割合にする必要がありますので、ここは是非よく考えていただきたいと思います。

そしてですね、これも重要なんですが、「授業時間外学習」がどれくらい期待されるか、もっと強く言うと、要求されるか、ということを書きように言ってきました。1 時限の授業に対して 2 時限分の学習をする、実技・実験ではちょっと違いますけれども、いわゆる講義科目は 2 時限分の学習を必ずする、という前提でシラバスを作ります。そうすると、シラバスで予習したり、復習したりする助けになるような情報を入れておかなければいけないということで、例えば課題図書ですとか、あるいはグループワークをするなど、色々なやり方があると思いますけれども、授業外でしっかり学習するように、シラバスの段階で作っておくということが非常に重要かと思えます。

そこで、さっき言いかけたことに戻りますけれども、科目の精選・統合と同時履修科目の絞り込みが必要なのはなぜか、という話になるんですが、各種調査、東大調査、それから文科省の昨年の試行調査、あとは教育政策研究所が経年的に行っている調査を見ても、おしなべて日本の大学の学生はたくさんの授業を並行してとっています。だいたいどの調査でも最頻値は 1 週間に 12 科目とってる、多い人になると 20 科目、これは資格とかが絡んでいることが多いですけれども、履修している場合もあります。従いまして、授業に出てる時間は非常に多いんです。あまり欠席もせずに行き行っている人も少なくないと思います。けれども結局時間は限られているので、たくさん授業に出れば出るほど授業外の時間が減ってしまうということになるんですけれども、そんなにたくさんの授業を同時に週に 1 回履修するよりは、もう少し科目の数を絞り、その代わりにそれぞれの科目でそれなりの量の課題を出して、あるいはグループワークをして、もっと掘り下げていくような授業を、もっと深める学びをすることが重要ではないかと思えます。そうすると、時間割をパッと作ってみるとですね、結構授業に出てる時間が限られてきますから、空き時間が多いじゃないかというように見えるわけですが、その空き時間にうちに帰ってからとかではなく、図書館に行って勉強するとか、あるいはグループワークをするといったように

使って、やはり授業外の学習をかなり深くすることによって、初めてそれぞれの科目に掲げられている目標が達成できるというような、そういう授業の作り込み方がこれからは求められてくると思えます。それが先ほどお話しした授業時間外学習のことです。

② 国際基督教大学の事例 2：成績評価

1. 成績分布の状況

次に成績評価ですが、これは先ほどお話ししましたように、きちんと到達目標それぞれについて評価する中間試験なり、レポートなりがあるということが大前提ですけれども、それに基づいて割合を出しますけれども、合計 100 点になりますが、60 点以上が合格、59 点以下は不合格ということになります。優・良・可・不可になるんですけれども、優が二段階ある、S というのも多いかと思えます。これでだいたいどのぐらいの平均になればいいか、これは相対的に評価するわけではないですし、人数が少ない科目もあるんですけれども、あまり安易に A がとれるのも望ましくないと思いますので、それなりに平均するとだいたい B の下あたりか、C の上あたりかという感じです。いろいろな科目によって少し違いもありますけれども。

2. 新任教員オリエンテーションでの情報共有

それで皆様の場合も、新任教員オリエンテーション・プログラムというのをなさっているかと思えます。これはですね、数年前から始めたんですけれども、3 学期制と先ほど申しましたけれども、入学も 4 月に入ってくる人と、9 月に入ってくる人がいるんですが、教員も 4 月に着任する人と、9 月に着任する人がいますので、9 月の着任者を待って、秋学期の 10 週間は通常よりも教える科目を 1 つ減らして、この新任教員オリエンテーション・プログラムを、義務ですけれども、受けることになっています。これは対面の活動もありますし、オンラインで自分でプログラムを受けるといったものもありますし、それから新任教員にはメンターというのが付くんですけれども、このメンターとのセッション、それから学生によるセッションというのがありまして、こういう授業が学生にとってはわかりやすい、みたいな話をしてもらったところもあるんですけれども、このプログラムでアセスメント、成績評価、ルーブリック、フィードバックなどについても、しっかりとベテランの教員が講演をしたり、あ

るいは教員、新任教員同士でディスカッションをしたりしています。特に大事なものは、若い先生はもちろんですが、ほかの大学から教授でいらっしゃる先生、平たく言うと偉い先生は、最初から新しい大学の文化に慣れていく場合もあるんですけれども、非常に違ったタイプの大学からいらっしゃいますと、このあたりについての意識が結構違うといえますか、差があるケースもあります。そこでベテランの先生として着任する場合にも、最初に申しました、「各大学の教育目標を達成し」、というところに関係してくるんですけれども、この大学ではこういうことを目標にしているので、そのための授業の仕方はこういうやり方になるし、そのための成績評価の考え方はこういうことなんだ、というのを是非とも理解していただきたいと思ひまして、このオリエンテーション・プログラムには非常に力を入れています。

3. 専修分野・コースでの情報共有

それからもう1つは、隣は何をする人ぞ、というのは宜しくありませんので、成績がですね、個別科目では無いですが、専修分野ごと（ICUは一学部の大学のため、専修分野と呼ぶ。鳥取大学の学位プログラムに相当）、あるいはコース・レベルごと、100番台の科目、200番台の科目、300番台の科目、あるいは一般教育科目のようなものになりますけれども、それら科目ごとに成績配分表を毎学期に出しています。Aが何パーセント、Bが何パーセント、というような。それで非常に高い場合、先ほどお話ししましたように、少し評価基準が甘いのではないかということになりますし、逆の問題もありまして、極端に不合格の人が多いというような専修分野、あるいは各プログラムがあったら、その理由は何かというようなことも、大学内で共有するようにしてきました。

本日お招きいただいた教育支援・国際交流推進機構「教育センター」というのが、たぶんそれに当たるところだと思いますが、ICUでは「学修教育センター」Center for Teaching and Learning (CTL) というものがありまして、URLが見えると思いますので、ご覧頂けますけれども、ここが今までお話ししてきたようなこと、先ほどのシラバス・ガイドラインを作ってアップしているのもここです。新任に限らず、どんな教員でもそうですが、シラバスの作り方についての相談であるとか、今度オンライン授業をするので、私が辞めた後でしたけれども、本当にここはもう大忙しだったんですけれども、オンライン授

業のサポートもあります。それから、先ほどの達成度の可視化という中で、いろんな調査、どの大学でもしていらっしゃると思いますけれども、卒業時調査などして、自分が何をここで学んだかということの可視化する努力をしているところも、ここになります。

10分くらい質疑応答に残すということでしたので、一旦ここで終わりにいたします。

質疑応答

橋本：どうもありがとうございました。それでは質疑応答に移りたいと思いますので、どなたかご質問とございましたら、よろしくお願ひいたします。

田村：どうもありがとうございました。田村でございます。ご発言がないようですので、まず皮切りに私から1つ質問させていただきたいのですが、非常に大きな流れから、具体的な事例までご紹介いただき、ありがとうございました。私は教育を担当しておりますので、特に最後のあたりでお話しになった、ベテランの先生がおいになった時も、研修をされているというところに関心を持ちました。こうしてFDをしているように、研修に努めているわけですが、特にシラバスについては、日本の大学で学んできた我々の年代の教員にはそういった土壌が無い者がかなりおります。シラバスの重要性ですとか、あるいは成績分布も含めて、疎い人間が多く、その辺りの意識改革が必要だと痛感しています。もしこれまでのご経験のなかで、効果的な手法や、取り組みなどございましたら、お聞かせ願ひできればと思います。

日比谷：それは大変に難しいご質問ですが、やっぱり時代は変わったのだということを理解していただかないといけないと思います。よく言われることですが、いわゆるベテランと言われる先生方が大学生だった時代と、今では大学進学率が全く違います。まあ良い悪いについていろいろ意見はあると思いますけれども、学生は昔の方がずっと良かったっていう人は多いのですが、私はそうとばかりも言えない、今の学生にもいいところは沢山あると思っていますが、ただ人数が増えたことはその通りですので、やはりこれからの教育というのは一方的に講義をするようなことでは、もううまくいかないということをよく説明する必要があると思います。

でも、学びのやり方っていうのは、小中高からも積み上げて少しずつ変わってきているわけで、なんか大学に

行ったら一方的でつまらないって言われるのは、やはり大学教育としてよろしくないかなと思います。あとはアクティブラーニングっていうのがある時期からすごく言われるようになったんですけど、それもですね、ただディスカッションをなさいたいなことではもちろんいけないわけで、しっかりした講義が否定されているわけじゃないっていうことを強調したほうがいいと思います。講義あつてのディスカッションであり、グループワークであつて、そういうことベテランの先生はお得意なはずですから、良いところを活かしていただき、また若手の先生に教えてもらったりすると同時に、少し例えば今回のオンライン授業なんかいい例だと思いますが、もうとにかくみんなで助け合わないと授業できないという状況になってしまいましたので、そうすると色々な大学で、ちょっとIT苦手だという、まあ年齢と完全に連動するわけではありませんが、若い先生に手伝ってもらうこともあったと思いますので、同じようにそれぞれ得意なところを指導しあつて、というような精神でやるのがいいのではないかと思います。

田村：どうもありがとうございます。非常に身につまされる話で、なんとか我々も知恵を絞って頑張っていきたいです。ありがとうございます。

橋本：1つ質問させていただきます。スライド14番のところで、成績評価基準のところ、成績評価のポイントを具体的に記入してくださいというところですが、これはどういったことを記入すれば良いでしょうか。

日比谷：ここはですね、例えばレポートは何パーセントって書きますよね。レポート評価のポイントって、全員がやってるわけではありませんが、例えばループリックを使って評価するという場合、これこれのループリックで評価する、というのを書くところです。

橋本：これこれができるとか、どれくらいできるとか、記載するというのでしょうか。

日比谷：これこれと、これこれを、どれくらいできるか、例えば、「とてもよくできる」、「できる」、「普通」、「あまりできなかつた」、「できなかつた」みたいなものと、それから評価するポイント、例えば、「論理的思考力を見ている」とか、「表現力を見ている」とか、そういうポイントを書きます。

橋本：はい、ありがとうございます

第2部 鳥取大学の教学マネジメントをめぐって

藤村（学長顧問）：第2部の司会を務める教学マネジメント担当・学長顧問の藤村と申します。ここから本学のマネジメント層を対象とした意見交換会とさせていただきます。第1部の講演でご関心をお持ちになった方は引き続きご参加下さい。

はじめに日比谷先生から、本学のマネジメント層に対して何かメッセージのようなものがあればお願いしたいと思うのですが。

日比谷：メッセージですか？まあ、頑張ってください、という感じですが、逆にむしろお困りのこと、例えば特にこの点について検討中というのであれば、教えていただけますか。

藤村：それでは学長の中島先生。

中島（学長）：教学マネジメントについて、分かりやすくご指導いただき、ありがとうございます。私自身は学生の国際交流に理事として関与しておりまして、その時に学期制のこととか、ICUの資料も何回か参考にさせていただいて、学生を伸ばすためにしっかりした教育をしておられると感銘を受けた記憶があります。私はちゃんとした教育のためには、やはりちゃんとしたシステムを作らなければいけない、それからその中で熱心な先生がしっかりと取り組むことが大事かなと思っています。

現実に困った問題としては、大学の執行部と現場の教員との温度差というのが1つあります。現場の先生方には基本的に優秀な研究者が多いのですが、ある分野の専門家です。一方、執行部というのは逆にいろいろな高等教育のトレンドなど情報を得ていて、情報量に関して差が出ていて、現場との温度差を生んでいるということがあります。執行部の仕事としては、日比谷先生もおっしゃったように、教育のシステムというのをしっかり整備してまわしていくことが重要ではないかと思っております。そして、現場の先生方にそれを理解して、熱心に取り組んでもらうように、うまくまわしていくのが我々執行部の仕事かなと。そういう流れを作るために、こういうFDなど通して、現場の先生に伝えていかなければならないことを大変痛感しているところです。

それからもう1つ、学生のその成長の実感とか満足度

は、教育者として大事な視点だと考えていまして、その中で学習目標は本当に達成できたのかどうかチェックするというのが大事な作業かなと思います。教育プログラムにおいても、知識量が増えたとか理解度が上がったとか、そういうのを調べれば個々の授業でも、個別のテストでチェックしたらいいんじゃないかと。ただし評価の厳格性とか正確性が必要になりますが、そういうのをきちんと出して調べていくといいのかなと思います。ただ、学生が成長できたかを総体的にそこでチェックするというのは難しいと感じています。大学の教育で成長したんだって、自分で納得したらいいんですが、在学中はいろんな能力が伸びる時期でもありますし、ある経験、例えば課外活動だったり、海外留学を経験したり、伸びることはある、こういったことを測る、あるいは可視化する時にそういったファクターがあって、そこに難しさを感じます。

それでご質問なんですけど、本学に教育の理念というのがありまして、それが「知と実践の融合」、教育においては座学とか書物で得た知識をできるだけ現場で活用しようという意識、座学だけじゃなくて実験・実習・調査、そうした体験的な学修・教育を重んじる方向を目指しています。こうした教育に関して私が感じるのは、私も教育から足を洗って長いですが、実際やっていた時に感じたのが、学生個人個人の特質、器用だったり不器用だったり、消極的だったり積極的だったり、コミュニケーションがうまいとか下手、そうした生まれつきっていうんですかね、性格とか資質が、知識量・情報量のほかに、加わって来て、非常に評価が複雑になっているのを感じる。例えばその学生が身についたことができるようになるとか、コミュニケーション能力が上がった、多面的な視点から考えられるようになったとか、こんなことを客観的に測ったり、評価したりするにはどうしたらいいか。ルーブリック使ったり、ポートフォリオだったり頼ればいいのでしょうか、かなり主観的な評価になるというか、客観性をもたせるにはどうしたらいいか、教育に携わっていた時には感じていたところです。

日比谷：そこは私も非常に難しいと思っていたところですが、さきほど申し上げた卒業時調査というので、今まさに先生が言われた、何々ができるようになったとかについて 例えば、異文化に対する理解が深まったとかいうのは、ICUだとコンスタントに高く出るんですね。一方、

理系の専門の学生もいますから、そういう人たちは別ですけど、そうじゃない学生だと、数量的な思考ができるようになった、というのは高くない、コンスタントに低い、といったことはあります。いずれも自己申告ではあるんですけども、その結果と、その実際にどんな科目を履修してどうだったかななどを、詳しくクロスすると、少しは浮かび上がってくると思います。なかなか個人とつなげるのは、難しい時代になっているんですけども、やっぱり自己評価は、自分の実感って大事だと思いますので、それは1つの基準にしつつも、それをなんか別な客観的な指標とクロスさせて、それはそれで本当になるのであれば、それはそれでいいかなと思います。あと卒業論文・卒業研究だけで全てを測ることは難しいと思うんですけども、集大成ではありますので、そこでキーになる事を測っていくというのは、1つのやり方かなと思います。

中島：はい、ありがとうございました。なかなか小学校・中学校みたいに、一人一人に目がいくっていう訳にもいかないものですから。確かに研究室配属になれば、いろんな個々の学生の姿も見えてきますし、伸びも実感しているところです。ありがとうございます。

藤村：ほかにいかがでしょうか？

田村：何度も申し訳ございません。先ほどの学長との意見交換の中で、卒論でかなりいろんなところが見えてくるのではないかと。まさにそうだと思うんですが、そういった視点を、我々理系のものが多いため、もっていなかったと思います。非常に面白い、良い論文を書いたねとか、あるいは新しい意見が出たねと、いうことを優先していたように思います。しかし、振り返ってみますと、私どもも卒論を履修して、身に付いたと実感したということ、今思い出しておりました。先生の今お話があったところ、少し統計的に解析してみても、評価に使えるようなところは、卒論の中の評価でも、可能であれば今から手がけてみたいと思います。本当にありがとうございました。

話は変わりますが、私ども先ほど申しましたように、理系の学部が多い大学です。今日ご指摘いただきましたように、ディプロマ・ポリシーの中に「深い知識とともに幅広い」とか、かなりリベラル・アーツもやはり重視しなくちゃいけないと定めていて、卒業生を見ても専門

バカだとまずいというのを強く感じております。先生はこれまでいろんな大学を見ていらっしゃると思いますので、特に理系の学生におけるリベラル・アーツ、一般教養的なものをどういうふうに持っていけば、より現代社会にマッチして、しかも今後いろんなことに興味を持って深い楽しい人生を送れるのかな、というようなところについて、もしご示唆いただければ、我々もそれを参考に改革していこうと思うところなのですが、アドバイスをいただけましたら。漠然とした話で申し訳ありません。

日比谷：一般教育科目でリベラル・アーツ的なところに力を入れていると思うんですけど、特に理系だと顕著だと思いますが、3・4年になると研究室配属が決まって、もうそこで朝から晩まで実験しているという生活にどうしてもなりますし、さっき田村先生がいみじくもおっしゃったように、そういう生活をした人が何か新しい発見をすとかですね、卒論でなにか良い成果を出すという傾向はあると思うんですね。

一方そういう生活に入った3・4年で、1・2年の頃に勉強した一般教育のことを覚えていてくれればいいんですけど、もうどこかに行ってしまって、何していたんだっけ？みたいなことになる傾向も残念ながらあると思うんです。これは大きなカリキュラム改革を含むのでなかなか難しいですが、1年生の時に1年次セミナーとか、初年次セミナーとかやっていると思いますけど、新しく4年次セミナーみたいなものを作ってますね、それは研究室でやっている卒論の実験の話とかをするのではなくて、理系だったら理系に絡んでいること、例えば環境問題とか、今だったら感染症の問題なんかも興味を持つと思いますが、理系の知識も動員しながら、例えば感染症であれば、経済をとめないでどうするんだってという話は毎日話題になっているし、環境問題もそうですけど、人文・社会科学的な知識・学びが生きるようなセミナーというんでしょうかね。それで、こういうことは1・2年の時に履修したよねっていうことを、まず思い出させるのが大事だと思うんですけど。足りないことがあるんだったら、専門の分野で学習が進んだ目でまた新たに本を読んでもらうとかですね、あるいは人文・社会関係の先生に講義をしてもらうとか、やっぱり特に理系の人は一生涯懸命実験して、研究室にこもっているだけに、4年の時に意識的に少しそういうことをするのはいいんじゃないかなと思っています。

田村：ありがとうございます。今、思い返しますと、私はリベラル・アーツ的なものの考え方というのは、ドクター論文の序文を書く時に初めて意識しました。例えば卒論の前ですとか、あるいは修士課程に入った時点で認識できると、研究に対する理解も逆に深まるんじゃないかなと思います。素晴らしいヒントをありがとうございました。

日比谷：あともう1点付け加えますと、先ほどもちょっと何回か触れましたけど、「健全な倫理観を有し」というところをきちんと書かれていらっしゃるは大変素晴らしいことだと思います。それで特に理系の場合は、過去にいろいろな問題もありましたけれど、実験データを捏造しないとか、ちゃんと実験のノートをとってみたいなことは指導されていると思うんですけど、やはり倫理とは何か？という問題は、捏造しちやいかんとか、しっかり記録のノートをとりなさいっていうレベルの話ではなくて、倫理学の文献はたくさんあるので、そういうところにディプロマ・ポリシーをつなげて、ここに書いてあるのはどういうことなんだろうねっていうところから少し哲学的な問題に進んでいくとか、そういうやり方もあると思いますね。それだと今の枠の中で、研究倫理教育をなさる時に少し発展させるっていうようなやり方です。新しいセミナーを作るのはけっこう大変ですので、まずはそのあたりかなと。

田村：ありがとうございます。学部でも卒論書く学生には研究倫理セミナーを必ず受けるようにさせていまして、そうした中でもう少し掘り下げて、先ほどご指摘いただいたように、倫理ってなんなの、ということも含むような教育内容というのが必要になるのかなと。どうもハウツーとか、ノウハウに陥っちゃうようなところがありますので、それだとまずいなと。

日比谷：コピペはいかんとか、そういう話になって。コピペは多いですから、コピペがいかにというのが倫理じゃないとは言いませんけど、もう少し考えてもらいたいと思います。

藤村：ほかにはいかがでしょうか？

山根：地域学部の学部長をしている山根と申します。貴重なお話、面白くうかがいました。学部長としては身につまされるような、いろいろやらないといけないなということが、課題としては出てきたんですけども、大きな

話ですね、到達目標というか、ディプロマ・ポリシーをもとに到達目標を明確にして、それを実現するためにプログラム、カリキュラムを考えて、評価もちゃんとやるって、そういう発想は非常によく分かるわけです。ただ、工学的な発想っていうか、だと思んですけども、学部の教員たちに、こうした発想では抜け落ちているところがあるんじゃないか、みたいなことを言われるわけですね。また例えば倫理観の話がありましたけど、情意的な意欲とか関心とか、あるいは価値意識とか、そうしたものを育てることを目指すわけですが、それは大事だと思いつつ、到達目標化できるのかっていうことを、教育学をやっているプロもいるので、いろいろ言われるのですね。そこでルーブリックなどによって、できる、できないがはっきり分からないものを評価する方法がでてくる訳ですけども、その辺をどこまで要求するのかなっていう。例えばルーブリックってありましたけども、個々の先生がそういうのをきちんとつくって評価してくださいと言うのは簡単なんですけど、相当な負担を強いってということになるので、そのあたりのさじ加減というか、どういうものでしょうか。ご自身の経験とかも踏まえて、どのようにお考えでしょうか。

日比谷：ICUでも負担だって、散々私も言われてきましたけれども、まあそれはいいとしてですね、ルーブリックについてはワークショップみたいな形で、分野の違う人で、自分が作ったルーブリックを共有しながらっていうようなことをしていると、時間もかかりますし、そんなことをしている時間はないとか言われるんです。けれども、やっぱり今日もですね、私がずっとお話ししていただいて、呼んでいただいてありがたいと思いますけれども、それに今は（コロナ禍で）なかなかそういうことはしにくいんですけど、なんか自分で手を動かさないと身につかないっていうのがあるんですよね。座って話を聞いているだけではなくて、例えばシラバスについても、皆さんのシラバスをも持ってきてください、それで誰かのシラバス、誰かにボランティアしてもらわなくちゃいけないんですけど、それをみんなで講評し合うみたいな、そういう文化が必要かなと思います。ICUだって別にそういうことする人ばかりじゃないんですけど、比較的大学が小さいということと、もともとリベラル・アーツ大学だということと、その辺の意識は、私は途中から行ったのでそう思うのかもしれませんが、やはり高い

な、と感じました。

山根：ありがとうございました。そういうワークショップとか、フォーラムとか、やれるような文化というか、雰囲気づくりというのが大事かなと思いました。

日比谷：それからですね、執行部のほうが強制でやるぞとか、出席とるぞとか言うのが1番いけなくてですね、自然と集まってくるような雰囲気を作るのは、大変難しいとは思んですけど、あそこに行ったらすごい目からウロコだった、みたいな体験をするとですね、また行ってみようかなってなると思います。

山根：ありがとうございました。

藤村：いま話題にあがりましたルーブリックですけども、ICUではどれくらいの科目、どれくらいの割合で行われていますか？

日比谷：ルーブリックを使ってる科目は、半分は無いと思います。

藤村：主に文系の科目ですか。

日比谷：文系科目ばかりではないです。それから、卒業論文に関しては、みんながそれをしっかり使って評価しているかはチェックしていないですけど、一応サンプル・ルーブリックのようなものはあります。

藤村：もう一つお伺いしたいんですが、教学マネジメント指針は基本的には学士課程教育に対してですが、大学院に関しても似たようなものを各大学で考えなさいということになりますか？

日比谷：それは教学マネジメント特別委員会で作った指針を大学分科会に承認してもらった時にも出た質問で、これは大学院は対象じゃないですよ、と言われて、それはその通りです。ただ基本の考え方がそんなに変わるわけではありませんで、まずは大学院についてはそれぞれのところを考えてくださいというのが、あの時点での答えでした。

藤村：まだ質問があるかも分かりませんが、そろそろ時間ですので閉じたいと思います。年末の慌ただしいところ、興味深いお話をありがとうございました。

日比谷：ありがとうございました。

〔付記〕本講演会は2020年12月18日（金）16:30-18:00にGoogle Meetのオンライン方式で実施された。

（編集：高等教育開発センター教授 武田元有）